

に踵を返さない、矢のつきて、一敗地に塗れるまで、戦ふと云ふ決心で始まつた。

學生保證人と、學生と、これが一團となり、社會一部の同情者と、一隊を成して行進した。

我々は我々の立脚點を明にし、且つは日本醫界の主權者である可き彼れ悖德流を葬る可く、隨分社會に向つて咆哮した。この苦心にあつても、時に我々の歩調に少數の不具者を出したけれど終始一貫して進軍した、この精銳な、猛良雄の行動と、奮進とを誰れか驚きの目を以て睹ぬ者はなかるう。

されど、我々の心の叫び、やる瀬なき涙の痕と、指の瘡痕とは未來永劫の記念となる可き、價值あるものである、吾々は終いに生命の復興となり、再びこの城に依り心靜に學窓にあり得るは決して偶然ではない、吾々の救濟者であり、親父であり、慈母である所の五名士と佐藤先生とは、實に暗夜の光である。

かくしたる、この生涯唯一の行動に對して、少なくとも社會に地位と名譽とある人が隨分苛酷で、只智の人にして情の人でなく、表裏の著しき差異あるを知つた。

彼等の胃の腑を見よ、もう腐敗に腐敗して、惡臭を放つて殆んど其の用を辨ぜぬ、それ故に我々があの様に涙を呑んで事の次第を闡明しても、一向嚙下することが出來ん、まして消化することは尙ほ出來んのだ。物的顯榮にのみ憧れてゐる彼等は、正義の聲さへ聞かえん可憐者だ。

且又彼等の目玉は陳つてゐる、唯物的繁榮文明の中に、徒に佇立して空しく顯榮にのみ眩み、權門に媚び、己が官位の向上をの

み望みつゝある彼等は、彼等の眼前に教育界のかゝる缺陷と、矛盾との炎々たる炬火ありしを見えざりしか。

國家に一段の價值と、權威とを附與する現教育界の改善なきへ裏心なすの意志なきを見ても、俗惡膚淺な彼等の胃の腑が、那邊より滋養を受けつゝあるか推察する時、我々は熱心に、且つ深刻に、醜い様い、現代人士の胃の腑に、呪と、嘲とをもつて、土砂を投げこんでやるより外に、道のないのを悲む(五、一〇、三〇)

會 報

謝 恩 辭

先生の我等學生を薰陶せられしこと茲に年あり顧みれば我等が日本醫學専門學校を連袂退校して東京醫學講習所に入學するに際して先生も相携へて同校を辭し本所に醫化學の講義を擔當せられぬ、學生一同は之を徳とし深甚なる感謝を捧ぐる者なり。然るに今や先生職を辭して去らる、訣別悲哀はさること乍ら我等は先生の將來を祝福して止まざるなり、此の銀盃、赤誠を以て聊か舊恩に謝せんとする

微意のみ、幸に受納あらんことを希ふ。

大正五年十二月

東京醫學講習所學生會員一同

櫻木清耳先生

入營者諸君を送る

今日、こゝに入營者諸君の告別式を擧ぐるにあたり全校學生四百名に代り送別の辭を述べ。

顧みれば五月一日以來約半年にわたる正義の戦に於て吾等は血に誓ひ義に集りて、その親しみは骨肉にも勝り、或は共に叫び或は共に泣き、進退、常に清き陣營を維持して亂るゝ所なかりき。

幸にして五名士並びにその他の同情により、秋雁聲高く金風地こ滿つるの候、わが東京醫學講習所は開設せられ、空しく半生の志望を放棄して社會に漂浪せんとせし幾多の青年ははからずも復活の期を得たり、隅田河畔の夕、月影何ぞ清かりし、祝宴、如何に歡樂極りなかりしぞ。

爾後、自治を標望し、香しき校風に懐れ、益々將來發展の緒に就かんとする時にあたり、この光榮ある自治の堅城よりして十餘名の勇士を送らんとす、送る者、送らるゝ者、共に門前に相顧みて感慨無量、轉た秋風の蕭殺たるを覺ゆるなり。

されど陸に、はた海に行く者、是れすべて國家の干城たり、今や世界戦亂の中において吾人の安んじて勉學に就り得るは卿等の

力によらずして何ぞ、されば吾人は講んで卿等を送らむ。

行けよ、さらば、而して歸る日の幸多きを待つと共に、殘る吾等は極力卿等が遺志を繼ぎて大成に努力せん。

萬里の波濤、風荒む日、鷄林八道、積雪に埋もるゝの夜、只諸君の健康と自重とを祈りて息まざるなり、この一言を以て送別の辭となす。

大正五年十一月八日

入營者姓名

- | | |
|-----------------------|-----------|
| 佐倉第五十七聯隊第十一中隊 | 小谷 無遠(舊) |
| 朝鮮北青第七十四聯隊第十中隊 | 成田 義英(四) |
| 朝鮮咸鏡北道會寧第七十三聯隊第十中隊 | 丸山 郁雄(四) |
| 大分歩兵第七十二聯隊第四中隊(志願兵) | 波津久 統重(三) |
| 熊本野砲第六聯隊第六中隊 | 今 藤 繁(三) |
| 字都宮歩兵第六十六聯隊第四中隊 | 西山 晴雄(三) |
| 善通寺輜重兵第十一大隊第一中隊第五班 | 緒方 晴逸(三) |
| 旭川第八聯隊第三大隊第一中隊第一班 | 増 田 貢(三) |
| 未詳 | 春日 龜吉(三) |
| 熊本第六師輜重兵第六大隊第二中隊第三勤務班 | 菊野 景光(二) |
| 水戸第二聯隊第十二中隊 | 高田好之助(二) |
| 山形歩兵第三十二聯隊第二中隊(志願兵) | 齊藤 健吉(二) |
| 近衛歩兵第三聯隊第四中隊 | 林 實(一) |
| 水戸第二聯隊第十二中隊 | 柴 孝(一) |
| 廣島歩兵第十一聯隊第三中隊第三班 | 山本照太郎(一) |

計 十五名

會計報告

大正五年拾壹月拾五日調前日本醫學專門學校
學生團會計決算

收入之部

一金壹百參拾九圓貳拾貳錢五厘也

大正五年五月拾七日前各學年會計係ヨリ引受金額

一金貳千四百五拾圓也

是ハ大正五年九月拾五日迄入願費總額

一金拾七圓七拾六錢五厘也

各學年會計決算殘金

收入合計金貳千七百五拾七圓貳錢也

支出之部

一金貳千四百五拾貳圓貳拾六錢也

殘金之部

一金參百〇四圓七拾六錢也

內貸出金貳百八拾四圓七拾六錢也

現金貳拾圓也

外ニ秋氏ヨリノ借金壹百五拾圓也

之ハ學生會費ヨリ立替返濟ノ件承認ヲ得タリ

右之通リ相違御座無ク候

會計係長(中本富太郎)

創立委員居邸

麻布靈南坂

寺尾亭

小石川區指ヶ谷一四七

福本誠

同 關口臺町 大道社

大角桂巖

麴町區中六番町四

高橋琢也

本郷區千駄木町一七一

秋虎太郎

* * * * *

協賛員名簿に誤りあり左に訂正す

林學博士

白澤保美氏

神社局長

塚本清治氏

土木局長

小林一太氏

編輯の後に

生等菲才紀念號の發行に際し少なからぬ努力をなせるも遂に短時日と歳末の活版所多忙の爲めに因り漸く如斯き雜誌を諸君の前に提供することとなりぬ。奮闘の半年を回顧して好紀念ともならば望外の幸にして、最後に記録係諸氏の勞を多とし紙面の都合上峰野君の「日立鑛山」及び小川豊丸君の獨文「我等の祝賀」を次號に譲るべく余儀なかりしを謝す。

編輯部同人

大正五年十二月二十三日印刷
大正五年十二月二十八日發行 (非賣品)

編輯人 上村透
東京市本郷區森川町一番地

發行人 宇津木斌
東京市神田區東紅梅町二番地

印刷人 一噌定次郎
東京市芝區兼房町十五番地

發行所 東京市牛込區神樂町二丁目廿六番地
東醫學士會

復刻版発刊について

東京医科大学は、本年（一九九六）創立八〇周年を迎えた。維持会では、その記念事業として「奮闘之半年」の復刻版を発刊した。これを機に温故知新となれば喜ばしいことである。

本書は、本学の草創の苦悩と苦闘を物語る血涙の創立史で、血署連判状と共に本学の宝である。

大正五年九月東京医学講習所が開設され、その十二月に本書が発刊されているが、現在その一冊が本学資料室に保管されている。外観はひどく手垢の附いた古ぼけた、今にも崩れそうであるが、崇高で清潔感のある一冊である。

その後、昭和三年（一九二八）附属病院入院棟全部及び基礎医学教室の大半を焼失した。その復興後援運動の一助として再版されたものも現存は二冊である。このように本学存亡危機の難局に直面したときに発刊されたことは、他に類のない誕生の歴史と伝統が脈々と生き続けていることである。

二十一世紀に向かって、変革・転換期であると今日的に提言され、他方、情報化に基づいて判断・行動の正確性が求められる時代の激変のなかで、本学が過去の歴史の上に立ち大飛躍発展しなければならぬ時の発刊は、前回の再版発行に比して勝るとも劣らない有意義なことと思う。

幸いにも本年を記念して、本学が二十一世紀に向かって生存を賭けての「将来構想審議会」が設けられ、白熱した議論が交わされている。本学創立百周年には、その構想が実現、完成できることを冀うものであるが、将来に対する計画はもとより、基本に本学の歴史に参加することが、東医関係者にとって最も栄光であることを知るべきである。

終わりに本書復刻版発刊にご厚意を寄せられた永井理事長、渋谷学長に敬意を表する次第である。

平成八年十一月十六日